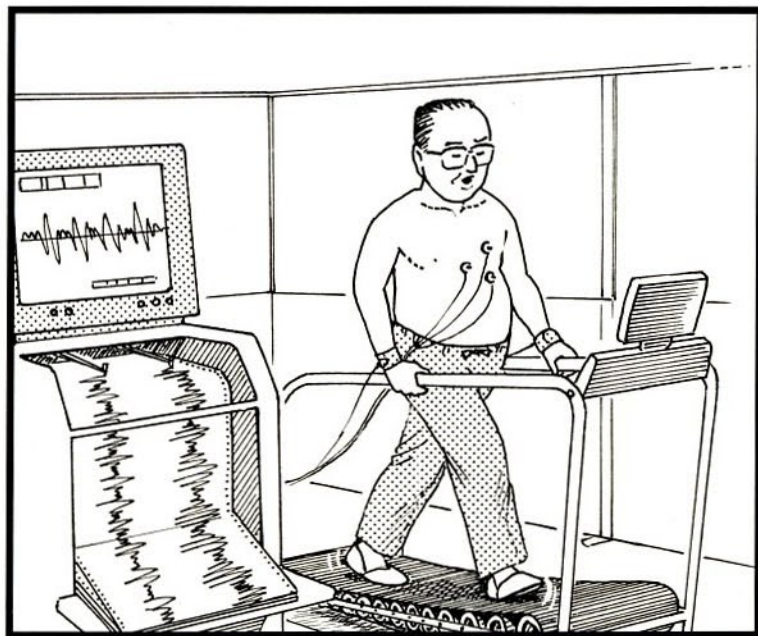


心臓の異常

を検査する時に受ける検査



日本臨床検査医学会
大林 民典



場合、お医者さんは負荷心電図を撮ることを患者さんに勧めます。負荷心電図とは患者さんに運動をさせ、心臓の働きを活発にして心臓がより多くの酸素を必要とする状態にしたうえで、冠状動脈から必要に見合うだけの酸素、つまり血液を送り込めているかどうか検査するものです。こうすることによって安静状態では分からない潜在的な心電図の異常所見を引き出すことができるのです。

運動負荷法のうち昔からおこなわれているのが凸状の二段になった踏み台を上り下りするもので、マスター二階段試験といわれるものです。そのほか最近ではエルゴメーターといって固定式の自転車のペダルを踏ませたり、トレッドミルと呼ばれる室内歩行器の上を歩かせたりして心臓に負荷をかけます。後の二つの方法は心電図や血圧、脈搏などをみながら負荷をかけますので、なにか心臓に異常が起こりそうになったらすぐ負荷を中止して対処でき、安全性の点で優れています。また運動負荷量を何段階にも分けて調節できるので、どの程度の運動まで大丈夫なのか客観的に知ることもでき、またお薬の効果を確認することもできますので安全な日常生活を送る上での目安を知ることができ大変有用です。

お医者さんから負荷心電図を撮ることを勧められたら是非一度受けてください。

急に胸が痛くなって心臓が悪いのではと心配になった経験がきつとあることでしょうか。急に胸が痛くなるのは何も心臓の病気に限ったことではありません。胸痛を訴えて外来を訪れる患者さんの大部分は肋間神経痛など、心配のない病気であることのほうがむしろ多いくらいです。

しかし、なにしろ心臓の病気は直接命に関わることですから、お医者さんは心臓の病気の可能性がなにかよく患者さんの訴えを聞き診察します。そのうえで心電図を撮ることになります。心臓が悪くて胸が痛くな

るのは、冠状動脈といって心臓に酸素を送り込む血管にコレステロールが溜まって狭くなって、心臓の働きに必要なだけの酸素を送り込めなくなり、心臓の筋肉が悲鳴を上げるためです。たまたまこのような状態にあるときに心電図を撮るとSTという部分が低下し、T波が低くなったり逆転しています。しかし、外来を訪れたときには、すでに胸痛は治まっていて心電図には何も異常が認められないことがよくあります。

安静時の心電図が正常でも、問診や診察から心臓の病気がどうしても疑わしい